

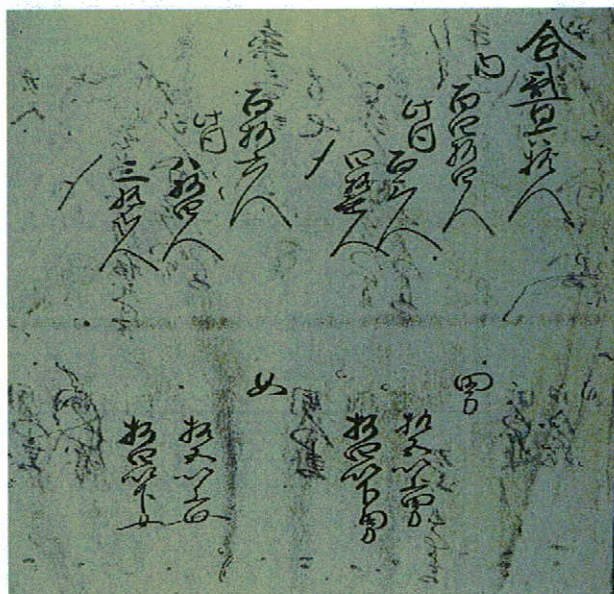
# 茶 羅 仏 だ よ り

18号

## 平成の子供達

平成23年7月早朝のラジオ体操に参加していた子供達で総勢41人である。元気な彼らが将来の金戸を担ってくれると思うと頼もしいかぎりである。江戸時代中期から昭和の戦後まで金戸では約60戸以下の家族で、人口300人ほどしか生活が出来なかった。村の人口が草高に比例するので、草高679石の内諸経費を含めた年貢率は64%にも達した。昔から大人は1年に1石の米を食べるので、残りの244石で244人しか生活出来ないのだが、日稼ぎや米以外の産物もあり300人ほど生活できた。天明9年(1789)金戸の人別帳には、総人口が260人で男144人、女116人が住んでいた。15歳以下の子供は73人いたが半数は成人しなかった。

平成の世になって22年度では555人の139戸の大所帯となり多様な価値観念を持ちながらも協働で村づくりに邁進する



地区となった。子供達が金戸の原風景を第1の「ふるさと」として持ち続けてくれる「ふるさと」とは、自然の大地であり体験である。単に生まれ育った家ではなく地域全体であり、同時に「村落共同体」でもある。その地域に住む人々との日常的なつながりを抜きに「ふるさと」は存在しない。風習やしきたりや歴史などの無形の「文化」を含めて形成されるものが「ふるさと」である。

## 金戸の価値観

往古から村落共同体の信仰や慣習には「お盆に仏様を迎える行事がある」「先祖の供養が足らぬと悼む心がある」「祭礼の前に身を浄める事がある」「病気したときの祈禱場所がある」「疫病や天災の災難を除く風習がある」「屋敷神・地神のある家がある」「植えてはならない植物がある」「藤内・頭振を被差別することがある」が常識となっている。

金戸にはそのような諸信仰・諸慣習に関心を持たず場所もない特徴がある。神様や仏様は参るだけで、神様や仏様を迎えるという感覚は持ち合わせていない。神様や仏様には祈るだけで、神様や仏様が祟るという感覚もない。朝に広間で神棚に柏手を打ち、隣の仏間で念仏を称えても何の違和感を持たない神仏一体の和光同塵の村人である。現代はあれもこれもお互いの価値を認める寛容がなくなり、あれかこれかにこだわり、かえって窮屈な毎日を送っている人が多くなった。

## 平成23年金戸の元気な子供達



## 昭和33年の子供達 (今のじいちゃんばあちゃん)



平成23年7月早朝のラジオ体操に参加していた子供達で総勢41人である。元気な彼らが将来の金戸を担ってくれると思うと頼もしいかぎりである。下の写真はみんなのじいちゃんばあちゃんであり、戦後の物のない時代を元気に生きてきた。しかしよだれ掛けの子達が多いなあ。男は丸坊主で女の子はおかつぱ頭だ。